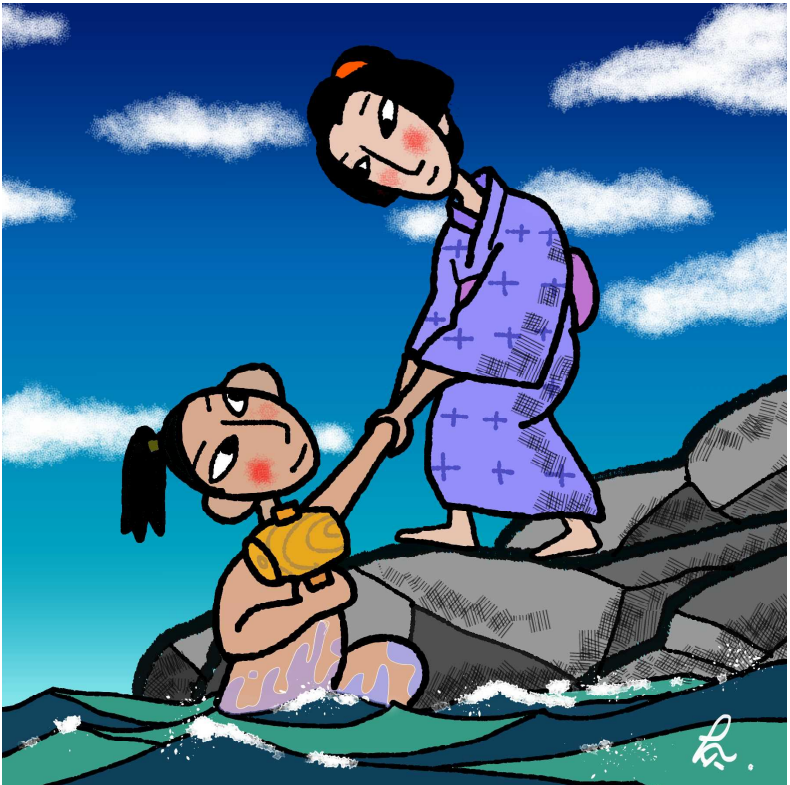


カタツムリの息子・鹿足郡吉賀町注連川

令和2年10月27日掲載予定

収録・解説・酒井 董美 ただよし

イラスト・福本 隆男



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_200705.html
https://kanbenosato.com/minwa/kancho_200705.html

語り手 小野寺賀智さん
 (明治23年生まれ)
 収録・昭和41年2月26日

あらすじ

あるところにおじいさんとおばあさんが、子どもを授かるよう神さまやも仏さまに祈っていました。おばあさんがお茶を摘んでいたらかわいいカタツムリが「わたしの子になるんでございます」と言いますから、手の腹に乗せて帰りました。

明くる日。おじいさんが酒屋へ薪を持って行こうと馬に積んでいましたら、カタツムリは「苞の中に入れて入れて、馬の鞍につけてつかあされえ。そしたら持って行く」。そうしたら「たせへせ、たせへせ」とカタツムリの子は馬を使って、酒屋の門へ行きました。そこにはきれいなお嬢さんが三人もおられて、「まあ、かわいい」とお金を苞の中へ入れ、カタツムリも入れてやりました。わが家へ帰ったカタツムリは「飯も食べず寝てしまいましたので、おじいさんとおばあさんは隣のおばあさんに様子を聞いても

らうと、「酒屋に娘が三人おれたが、どの娘さんか嫁にほしい」と言います。酒屋へ行つて頼みますと、今度は酒屋の親方が寝てしまいました。一番上のお姉さんが「起きてご飯をあがれ」と言いましたら、「カタツムリの方へ嫁に行つてくれれば食べる」とわたしや、乞食しても行きません」。しかたなく二番目の娘に言う「わたしや、紙袋下げて歩いて行きません」。一番小さい娘に言いますと、「行きますから、起きてご飯を食べてください」。お父さんは起きてご飯を食べて、二人の大きい娘は追い出し、一番下の娘に支度を置いて嫁にやりました。

ある日。カタツムリは「海辺へ行こう」と行った。カタツムリは、「この石の上へわしを置いて、この石でわしをたたきめいで針に糸を通して海へ放つてくれい。下から引いくれたらすぐ上がるから」。そうしたら、カタツムリは男になり。打ち出の小槌を下げて上がつてきた。家へ帰って小槌を振つて「米出え」と言えば米が出る。「錢出え」と言えば錢が出る。たいへん

な金持ちになったそうです。しかし、二人の姉は、追い出されたため、助けてもらわなければならぬと、お父さんのところへ行つても許してもらえませんし、妹の嫁に行つた先へ行つても、親にそむくような者は、絶対に寄せつけてはならぬ」と言われているので、二人の姉はずつと乞食をして歩いたそうです。

解説

関敬吾博士の分類では「本格昔話」の「誕生」の項目の中に「田螺息子」として登録されている。

語り手の小野寺賀智さんは、昭和55年に90歳で亡くなられた。彼女は明朗で魅力的な方だった。ご自分のことを「カブの婆」と称して、知り合った方々に民話について、の便りをこまめに書いておられた。

筆者は昭和37年から5年間、当地にいたが、よくお宅へお邪魔したものである。
 (元島根大学法文学部教授)